

## 目次

## 1章 動詞 — (日本語の) 自動詞・他動詞と vi・vt

1. 序論	2	・「形容詞+名詞」を活用する表現法について	3
		・強い vt であるにもかかわらず vi となることがある	6
2. vi について	9	2-1. 受動的な意味を表す vi	10
3. vt について	13	3-1. 再帰用法 = vt の (意味の上での) vi 化 (= 転換自動詞 converted intransitive)	14
		3-2. 形だけの目的語を必要とする vt	17
4. how と what と why の使い分け	4-1.	what か how か	17
	4-2.	how か why か	20
5. 疑問詞と前置詞	20		
6. 分詞について	6-1.	現在分詞 ① vi の現在分詞	21
		② vt の現在分詞	23
	6-2.	過去分詞 ③ vi の過去分詞	23
		完了の意を表す「be + vi の過去分詞」	25
		④ vt の過去分詞	25
7. 分詞・形容詞が単独で名詞を後ろから修飾する例	26		
8. 文型について	29		
9. 「vt+副詞」か「vi+前置詞」か	32		
10. say と tell、speak と talk	34		
11. 動詞に関するルールあれこれ		・目的語の内容・種類を使い分けなければならない例	37
		・特別扱いの動詞 have (と be-動詞)	38
		・「よい意味の動詞」、「悪い意味の動詞」という単純な思い込みは禁物	40
		・名詞をそのまま動詞化	40
		・誤用されやすい動詞	
		come と go	41
		doubt と suspect	42
		influence と affect と effect	42
		forget と leave	43
		「intended to have+過去分詞」について	43
		目的語が長いときには特に、目的語を vt の直後には置かない (= 副詞句が 割り込む) ことが多くなる	44
		動詞の省略	44
		目的語の省略	45

## 2章 使役動詞・知覚動詞とその関連表現

1. 使役動詞とその関連表現	2		
1-1. S + 使役動詞 + O (主に人) + 原形不定詞. の文型に関して	2		
a. make, have, let	b. get, cause, force, compel	c. help	これらに関する注意点
1-2. S + 動詞 + O (主に物) + 過去分詞. の文型に関して	5		
1-3. 「使役」以外の意味を表す例	7		
2. 知覚動詞	11		
2-1. S + 知覚動詞 + O + 原形不定詞.	11		
2-2. S + 知覚動詞 + O + 現在分詞.	11		
2-1 と 2-2 の違いについて	11		
2-3. S + 知覚動詞 + O + 過去分詞.	12		
不定詞および原形不定詞という名称について	13		

### 3章 助動詞

1. shall について 2
2. will について 2
3. 進行形のかたちで「進行」以外の意味を表す例について 4
  - 3-1. be going to-不定詞 及び be -ing について 4
  - 3-2. 進行形が表すその他の意味 11
    - 3-2-1. 「一時的な状態」を表す 11
    - 3-2-2. 「いや増す程度」を表す 12
    - 3-2-3. 繰り返される行為を表し、そのことに対する「いらだち」や「非難」を表すことも多い 12
    - 3-2-4. 「命令」や「拒否」を表す 13
    - 3-2-5. 「丁寧」な表現となる現在進行形・過去形・過去進行形 13
4. be to-不定詞 15
5. must と have to の区別 19
6. その他 22
  - ・否定の推量の can't と must not の違い 22
  - ・can と may の違いについて 22

### 4章 副詞

1. 副詞が修飾するもの 2
2. 副詞の位置 5
  - 2-1. 副詞の基本的な配置規則 5
    - 2-1-1. 一般論（副詞は被修飾語のできるだけ近くに置く） 5
    - 2-1-2. 動詞を修飾する副詞の位置（最も一般的な配置パターン） 8
      - ① 動詞の直前に置きますが、be-動詞（連結動詞）であればその直後に置きます。 8
      - ② 助動詞があれば、最初の助動詞の直後に置きます。 8
      - ③ 分詞・形容詞との結びつきの方が強い場合には、それらの直前に置かれます。 9
      - ④ 副詞関連語句を一体としてまとめる 11
        - 形容詞の enough について 11
        - 重言（じゅうげん）《tautology》について 13
      - ⑤ 副詞が後ろから前の名詞を修飾する例 15
      - ⑥ その他の注意点 17
        - much と very の使い分け 19
        - 比較級、最上級を修飾できる主な副詞 21
        - not と never の使い分けについて 21
  - 2-2. 副詞の意味カテゴリーによる位置の違い 23
    - 2-2-1. 時・時点、時間・期間、時間的前後関係、あるいは場所などを表す副詞 23
    - 2-2-2. 発信者の考えを述べたり、これから述べる内容を提示したりするための副詞（＝文修飾の副詞）の位置 23
      - ① 接続詞的な働きをする。 24
      - ② これから述べる内容の分野を明示する。または、どういう観点から述べるのかを明示する。 24
      - ③ 発信者の考えや主観的な評価を述べる。 25
        - rather や quite などについて 26
      - ④ 発信者の気持ちや感情を表す。 30
        - 文修飾の副詞の位置 31
    - 2-2-3. 様態（＝物事のありかたや行為のありさま）を表す副詞の位置 32
    - 2-2-4. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」、あるいは「主語の感情や意志を表す副詞」の区別 34
      - 2-2-4-1. 副詞と形容詞による文意の区別 34
      - 2-2-4-2. 「主語の感情や意志を表す副詞」について 35
      - 2-2-4-3. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」の、位置による区別 35

## 5章 分離不定詞

## 6章 部分否定 (=不完全否定)

序論	2
「部分否定」という文法用語の問題点について	3
多寡を相対的に言うときの not many 及び a few について	7
否定文中での and	9
否定文中の or	11
肯定文中での and と or	15
and/or を用いた表現	18
譲歩を表す and と or	18
同格や追加説明を表す or	20
both について	22
all について	22
否定文中での because-節について	23
コンマの重要性について	24
否定文中での because-節以外の節の扱いについて	26
否定文中での as-節について	26
否定文中での like (前置詞・接続詞) について	30
参考: 否定の日本語文中での「~のように」他、まぎらわしい表現について	31

## 7章 仮定法

1. could と was able to ... の違いと、過去時制の could と仮定法過去の could について	2		
2. could have と could not have について	10		
3. 丁寧表現・婉曲表現など	13	過去形・過去進行形による丁寧表現	13
4. 依頼をするときの表現	14		
5. if-節を使わない仮定法	16		
6. 仮定法の倒置	18		
7. 普通の条件節に近い仮定法	20	as if や if only のあとには、現在形を置くこともあります。	20
		as if + as ... as 構文	21
8. should, were to について	23		
9. その他	24	I wish S' V. について	24
		that-節中での should、あるいは仮定法現在などについて	26
		仮定法+比較	27
		過去形と過去完了形	28

## 8章 文の構造と文章の組み立て方の特徴

1. 英語での「文」の組立て方の特徴 (=「結論や主題・テーマ等を早く言う」ための表現法)	3
1-1. Yes か No かの明示	3
1-2. 否定文か肯定文かを早く明示する	6

① 否定語が繰り返る例	6
② 否定語の繰り返しができない例	8
③ not A but B における not の繰り返り	9
④ 比較の構文における否定語の繰り返り	11
⑤ 否定的な内容を表す副詞句の繰り返り	11
1-3. 文型や文の構造をなるべく早く明示する	12
① 形式主語や形式目的語を用いるなど	13
② 不定詞の意味上の主語について	15
③ 動名詞・名詞・名詞句・名詞節を受ける形式主語	19
④ 強調構文	20
⑤ 形式主語のようであって形式主語ではない例	20
⑥ 英文でも主部が長くなることもあるなど、例外もある。	20
1-4. 主役(主語・目的語・補語)を明示するために、先行詞と関係詞節、あるいは同格を表す名詞節を分離するなど、長い修飾語は後置させる。	21
1-5. 倒置させる。	23
1-6. その他	23
2. 「結論を早くは言わない」日本文	24
翻訳文の例	29
複数の修飾語を並べるときの留意点	36
わかち書き	38
3. 英語での「文章」の組立て方の特徴(=「結論を早く言う」ための表現法)	48
3-1. 論の展開の仕方	48
3-2. パラグラフ	58
3-3. 前出の語・内容を受けることを優先する	60
受動態について	64
倒置について	66
話の流れをよくする	67
文末・文頭に置いて強調する	68
4. 同じ言葉の繰り返しを嫌う	69
5. 類義語・同義語の反復(並べて意味を強める)	75
6. 英語と日本語の語彙について	77
6-1. 序論	77
6-2. オノマトペ	81
6-3. 生活文化とその言語	83
6-4. 同音異義語と多義語の違い	85
6-5. 英語での造語のしかた	86
6-6. 同音異義語	89
6-7. 多義語	90

### 3-2. 形だけの目的語を必要とする vt

We would **appreciate it** if you paid [would pay] promptly. (すぐにお支払いいただければありがたいと思います。)

appreciate はほぼ vt として用いるので (本章 1-13 下を参照)、この **it** がなければ、if 節が目的語 (=名詞節) となって、「~かどうか」の意になってしまいます。この **it** は文法的整合性をとるために置くもので、たいした意味はない、いわゆる「漠然とした状況を表す」ものです。appreciate **it** は、再帰用法の場合と同じく、vt である appreciate を vi 化するためのものと言うこともできます。

他方、Do you **mind if I smoke here?** のような例は、「vt+名詞節」にも「vi+副詞節」にも分類されていて、辞書等でもどちらかにはっきりとは決められないようですが、Do you mind **it** if I smoke here? と、it を入れることは普通はしません。

I wonder if [whether] it will rain. 「雨が降るかしら」は「vt +名詞節」に分類されます。同じく、I wonder **it** if it will rain. とはしません。

※ Do you mind if I **used** your car tonight? や I wonder if [whether] I **could borrow /use/** your portable phone. の例のように、if 以下を仮定法にすることもあります。

※ I wonder if he is over fifty. 「彼は 50 は過ぎていないと思う」の例について、『ジーニアス英和大辞典』では、「if 節中の肯定・否定が意味上逆転する。I think he is not over fifty. の含みがある」としています。if 節が否定になる I wonder if [whether] he isn't over fifty. は、I think he is over fifty. に相当するとしています。

if 節ではなく that-節が vt の目的語となると、その that-節を受ける形式目的語の **it** を前に置くことがよくあります。その目的は、文型を (早く) 明示するためや、文法的整合性をとることです。→ 8-13

He made **it** known to his friends **that he was going to marry her.** のような例が、文型を明示するための例です。

「文法的整合性をとる」と言うのが難しく聞こえるかも知れませんが、簡単には「文法的調整のため」ということです。たとえば see (to it) that SV や look (to it) that SV 「S が V するように気をつける」で **it** を置くのもそれにあたります。

that-節を前置詞の目的語にできるのは、in that SV, except that SV, but that SV, save that SV のときであって、to の目的語にはできないというルールに従って、see (to it) that SV のような少々面倒なカタチとなります。

I saw to it that things were done as he wished. (彼が望むように物事がなされるように私は配慮した。) → 26-6

次のような例では、**it** は直後の that-節を受けるので、文型をはやく明示できるとも言いかねますが、**it** のあとに必然的にポーズが入るために、情報の受け手は that-節の内容に集中できる、つまり、発信者は that-節の内容を強調することができる、ということになります。I resent (it) that she did that. I can't help it (that) he doesn't like me. → 26-7

## 4. how と what と why の使い分け

### 4-1. what か how か

**What** do you **feel** about it? は「まれ」→ **How** do you **feel** about it? が普通。

**How** do you **think** about it? は「非標準」→ 正しくは **What** do you **think** about it? 『ジーニアス英和大辞典』より **feel** には vt もあるものの、このような場合には vi として用います。つまり、その「感じ方」を問うために疑問副詞の **How** を用いるのが普通で、vt の **think** に対しては、その目的語である疑問代名詞の **What** を用いるのが正しいということです。

※ いずれの例でも、副詞句の about it は「おまけ」にすぎません。about を of に代えても同じです。

**What** do you **think** of things in general? (一般情勢をどのようにお考えですか。)

※ 『オーレックス英和辞典』の、ネイティブスピーカー100人に対する複数解答のアンケートでは、**How** do you **think** about his idea? を使うと答えた人は1人に過ぎず、**What** do you **feel** about his idea? を使うと答えた人は11人です。また、同辞書では「学習者への指針」として、「客観的意見を聞く場合は What do you think about ...?、主観的意見を聞く場合は How do you feel about ...? を使う

ですし、紙の辞書には例文検索ができないという大きな欠点があります。電子辞書の例文検索機能を使ってできるだけたくさんの例文に触れると、ひとつの辞書だけではなかなか入手し難い情報を得ることができて、おもしろい発見をすることもよくあります。

### 2-1-2. 動詞を修飾する副詞の位置 (最も一般的な配置パターン)

副詞の位置は、「強調したいか否か」にも左右されます。強調するための副詞の代表的なものには、文を修飾する副詞や接続詞として働く副詞、あるいは文頭に置かれる「様態を表す副詞」がありますが、これらについては本章の後半 4-32 から取り上げることにして、ここからは動詞を修飾する場合の一般的な位置について述べたいと思います。

繰り返しますが、副詞の配置は比較的自由にできます。下の例を見てください。(助動詞にアンダーラインを引いています。)

Despite its romantic allure, gold has **historically** been a pretty lousy investment.

The male athlete **historically** has been an object of art and beauty.      This had been **historically** proven.

While for purposes of social control women have **historically been** viewed as “all alike,” ....

このような例を見ると、助動詞と副詞との位置関係には規則性が無いかのように思われるかもしれませんが、実際には、これから述べるような一般的規則があります。英訳の際に迷ったときには、この一般的規則に従うのが無難です。

#### 「中位」での副詞の位置

動詞を修飾する副詞・副詞句を、文頭でも文末でもない文中に置く場合 (これを「中位」とします) の一般的な規則は次の通りです。

※ 受動態・進行形をつくる be は助動詞に分類されるので、ここでは連結動詞の be とは一応区別しています。しかし結局、肯定文では「その直後に置く」のは両者同じなので、分けて考える必要は普通はありません。否定文については、次の ② の最後に述べます。

#### ① 動詞の直前に置きますが、be-動詞 (連結動詞) であればその直後に置きます。

She **desperately** wants a child.      We **gladly** accept your offer.      Our team **overwhelmingly** dominated the volleyball league.

We **greatly** appreciate the cooperation your company has given us.      I **sort of** expected it. (多少予期していた)

※ 意味によって位置が変わる副詞もあります。 I **first** met him five years ago. (初めて)      You go **first**. (先に)

He is **by pedigree** a nobleman. (生まれは貴族)      She is **likewise** a fine lawyer.      I was **immediately** aware that something was wrong.

Previews are **actually** dress rehearsals of plays, at a reduced price. (劇の試演は実際のところは割引料金で観られる本稽古だ。)

ただし「vi (自動詞) + 前置詞」では、副詞を vi と前置詞の間に挟める傾向が見られます。

look **abroad** for more business      look **around** for help      We looked **high and low** for the jewels.

She **complained bitterly** of the hardships in her life.

She **clung desperately** onto the rope. (4-12 の例も参照ください。)

※ often や always といった頻度を表す副詞はふつう「vi+前置詞」の前に置きます。

また、様態を表す副詞 (4-32) はしばしば動詞の後ろにも置かれますし、単純形副詞 (9章) は動詞の前に置かれることはありません。

#### ② 助動詞があれば、最初の助動詞の直後に置きます。

#### 助動詞が一つするとき

Over the last few years, unemployment has **greatly** diminished.

Despite its romantic allure, gold has **historically been** a pretty lousy investment.

## 序論

例えば *You can't fake it forever.* では、*fake it forever* をまとめて否定します。つまり「永遠に取り繕い続ける」ことを否定しますが、一時的に取り繕うことまでも否定するものではないので、「永遠には取り繕えない」ということです。もっとも、この文は「付け焼き刃は早晚はげる」と肯定文として訳すこともできます。*I can't wait forever.* も「ずっとは待てない」ですが、思い切って「しばらくなら待てる」と訳すことも、場合によっては可能です。*I'm not thoroughly tired.* も、「疲れきっているわけではない」と、「まだ多少の元気なら残っている」の、どちらの訳も可能です。

このように、否定語の後ろに語義の強い語を置いた場合でも、**その強い語義と対峙する「反意」までは否定できませんし、しばしば、その「反意」を肯定として訳すことができます。**

※ 部分否定の訳し方は二重否定のそれとも通ずるものがあります。*It can't be done without offending her mind.* 「そんなことをすれば必ず彼女の心を傷つける」では *be done without offending her mind* 全体を否定して、転じて肯定的に訳すことができる点が似ています。

「ご親切はずっと忘れません」と言うつもりで *I'll not forget your kindness forever.* と言ってしまうのは、日本人がよくやる間違いです。この文は、「永遠に忘れていく(状態が続く)こと」を否定はしますが、反意としての「いつかは思い出す」「たまには思い出す」ことまでも否定はしませんし、そのように肯定的に訳すこともできます。日本語の「永遠に忘れません」につられて機械的に訳そうとするからこのような間違いを犯してしまうわけです。改善策は、*I'll not forget your kindness | forever.* とポーズを置くか、書き言葉なら、*I'll not forget your kindness, forever.* とコンマを置くか、***Forever,*** *I'll not ...* と *forever* を文頭に置くことです。こうすれば理屈上は否定語の領域から解放されます。もっとも、*I'll remember your kindness forever.* と肯定文にすれば部分否定の問題は生じませんし、*forever* を使わずに、*I shall never forget your kindness.* で済ますこともできます。

(筆者も過去に *I'll not forget your kindness forever.* の類の間違った言い方を随分していたように思いますが、ネイティブスピーカーから指摘を受けたことは一度もありません。「言ってもわからないだろう」と諦められていた可能性もありますが、以心伝心というものもあるので悪意に解釈されていたとも思いません。しかし間違いは間違いなので、格好のよいものではありません。

なお、*I will not forget your kindness as long as I live.* は *as long as I live* の部分がコンマを打たずとも独立したものとして解釈されます。つまり、常識的に否定語の領域には入らず、*As long as I live, I will not forget your kindness.* と同意に解釈されます。)

- ※ *I, too, can't help doing it.* で *either* ではなく *too* を用いるのも否定語の前だからです。(ただし、*can't help* の二重否定的(=肯定的)な意につられて、否定語の後ろでも *too* にすることもあります。*You can't help rooting for him, too.*)
- ※ 例えば *fully* のように、否定語の領域において部分否定となることはよくあっても、完全否定にする目的で否定語の前に置くことは皆無に等しいような語もあります。

**副詞には意味が強いものが特に多いので、英文の構造上、かなり頻繁に部分否定の文が出来上がります。** 対して日本語では、述部を文末に置いてまとめて否定するので、英語の「否定語の領域」という概念は、日本人にはなかなかピンとはこないのも無理はありません。部分否定は日本人がつい誤訳しやすいものなので、よく気をつける必要があります。

- ※ 『日本人の英文法 III』(T.D.ミントン: 研究社)では、*It doesn't cost much more than 100 yen.* について、「これは基本的に *It costs more than 100 yen, but only a little.* (それは 100 円以上するが、100 円を超える部分はわずかだ) と同じ意味です」としています。これなども、*cost much more than 100 yen* を否定して、「100 円を大幅に超えるということはない」ということです。このように、「否定語の領域」という考え方によって文意が容易に理解できることは少なくありません。

語義が強い語には「全体を表す語」も含まれます。これについても、全体については否定できても部分については否定できません。例えば *I don't know all the details.* が否定するのは *know all the details* 全体なので、*I don't know the details (at all).* とは全く意味が異なり、*I know some details of it.* ということを(積極的ではないにせよ)示唆することになります。

時間的なことに関して言えば、*He was not always idle.* では *always idle* 「いつも怠けていること」「怠け続けていること」は否定しますが、「たまには怠けること」「大半の時間は怠けていること」などまでは否定しません。大半の時間は怠けているとしても、

ただし、例えば「that 以下を明らかにした」「that 以下を発表した」という意なら、この慣用表現とは違う構文なので、it を残す方が文型がわかりやすく親切です。

They have **made it clear** they will not reverse the decision to increase prices.

また、I resent (it) that she did that. の it は文法的には省略が可能です。it を入れて直後にポーズを置けば注意を引くことができるので、強調するには有効です。次の例でも同じです。

I hate (it) that he won't be with me tomorrow. (26-7 および 1-17 も参照ください。)

他方、see to it that ... については it を省略できません。

I'll see to **it that this will never happen again.**

この it は直後の that-節を受けています。that-節を to-前置詞の目的語にすることはできないので、この it は不可欠ですが、to it をまとめて省いて、I'll **see that** this will never happen again. とすることはあります。

なお、that-節を前置詞の目的語にできるのは、but that SV, except that SV, save that SV と in that SV などです。これら以外では、前置詞の後ろに形式目的語の it を置かなければなりません。(save that SV は稀です。また、but that SV を接続詞の but と混同してはいけません。) このようなことについては、26-4 の ⑧ で詳しく述べています。

I can vouch for **it that a bath does wonders for the psyche.** (入浴は精神面に効き目があると断言できる。)

May I depend on **it that I have an engagement?** (約束ができたと思っていいいのですね。)

※ depend on it that ... 「〜だということをあてにする」

さて、「彼がここに来たことは明らかだ」は、日本語の語順のままに That he came here is certain. ともできますが、It is certain that he came here. とするのが普通です。文のかたちを早く明示し、そのことによって結論を先に言おうとするのが英語の基本です。形式主語や形式目的語を使った文にもそのことは典型的に表れていますが、それ以外にも、結論を先に言うための手法はいろいろあります。たとえば次の例もそうです。

He **made clear** his solidarity with the demonstrators. (デモ参加者との連帯を彼は表明した。)

目的語が his solidarity with the demonstrators のように少し長くなると、このように後ろにまわして SVCO の語順にすることがよくあります。(名詞節や不定詞を後ろに回すときには形式目的語を使えば文型ははっきりしますが、これに該当しない his solidarity with the demonstrators のような名詞句に対しては、形式目的語を使うことは普通はしません。→ 8-19)

目的語がどの程度長くなると後ろに回すのかというのには決まったルールはないのでそれは発信者の自由ですが、He **made** his solidarity with the demonstrators **clear.** とすれば結論が文末まで持ち越される(=途中までは SVO かと思う)ので、好ましいものではありません。先の例の方が、言わんとすることが早くわかります。次の例でも同じです。

Throughout these difficult talks we have tried to **keep open the possibility of compromise.**

また、補語に限らず、副詞句を先に置くこともよくあります。

Man tries to impose **on it** human order and civilization. = Man tried to impose human order and civilization **on it.**

(人間は、人間社会の秩序と文明をそれに押しつけようとしている。) ※ この it は、この前に出ていた Nature のことです。

英語のネイティブスピーカーは結論に関しては「せっかち」だと考えれば、英文の構成の「癖」が見えやすくなります。ただし英文でも、疑問詞が導く名詞節については主部が長くなることがあります。(主部が長い例は本章 8-20 でも扱っています。)

**How long yours will stay good** depends on its formula, but the general rule is about two years.

**How much a savings plan can earn each month** depends on a lot of variables: how much you save, how long you save and how you save.

**How early in a child's life deprivation causes a definitely hostile attitude** is debatable.

(親から引き離されるとどの程度早い時期に反抗的な態度が生じるかについては議論の余地がある。)

この場合、前の方の名詞も修飾されるのか否かは、文脈で判断するしかありません。しかし、

Language is **the tool and product** of all human society. のように（名詞 and 名詞）の前に冠詞が置かれていれば、これらは普通は一体と判断ができ、また、関係代名詞を使った形容詞節では、その節中の動詞の単複によっても、先行詞が単数か複数かはわかるので、手掛かりはけっこうあるものです。その他、『冠詞編』の「特集 12-8」も参照ください。

and と違って or なら一体性はないはずですが、冠詞を兼用することはよくあります。

**the** places or people they visit      The jury decides on **the** innocence or guilt of the defendant.

Many women would willingly step back into **the** manual or service work in which they started....

冠詞を繰り返すこともあります。

She wanted **a** blouse or **a** dress that made less of her breasts.      Are we **the** masters or **the** servants of computers?

## わかち書き

平仮名とカタカナは表音文字なので、並べたときに、その境界がしばしばわかりにくくなります。そのために、「表音」をできるだけ「表意」に換えるのが普通です。 ※ 平仮名やカタカナのような「一文字＝一音節」の語を「音節文字」とも言います。

はんぐるとかな      ハングルとかな      ハングルとカナ      ハングルと仮名

しかし、漢字にもカタカナにもできない語はあります。その場合には、語と語を離せば区別がつかます。「わかち（分ち）書き」と呼ばれるものです。下の真ん中の例がそれです。

なんというしぶといやつだろう。      なんという   しぶといやつだろう。      なんという、しぶといやつだろう。

アルファベット（＝letters）も表音文字なのでそれ自体には意味がありませんが、それがまとまった英単語（＝words）は当然ながら意味を成します。しかしこれを例えば **Heclungdesperatelytothestrapp.** としてもすぐには判読できません。

**He clung desperately to the strap.** なら容易に読めます。これも一種のわかち書きですが、このように、英文ではスペースも文の重要な構成要素です。

しかしながら、日本語ではスペースは活用されません。まだ漢字の読み書きができない小学校低学年の教科書では「わかち書き」は多用されていますが、大人の文では一般的ではありません。これは少し残念なことだと筆者は考えます。

沖縄である日本人教師にあった。      沖縄で ある日本人教師にあった。      沖縄で、ある日本人教師にあった。

わかち書きではなく このようにテンを打つのが一般的です。（※ 下線部はわかち書きです。） 例えば「習い性となる」は、多くの人は「ならいせい（ならいしょう）」がひとつの意味単位とと思っているようですが、このように、テンを入れないと別の語に変化してしまふことがあります。

※ 『大辞泉』では「習（なら）い性（せい）となる」について、『『習い、性となる』と区切る。『ならいしょう、となる』『ならいせい、となる』とは読まない』としています。意味は、「習慣は、ついにはその人の生まれつきの性質のようになる」としています。

しかし、テンを多用すると文が細切れになり、本当に必要な「文の構成のためのテン」との区別がつきにくくなります。したがって、先の例で「沖縄で」を強調する必要がないのなら、長い修飾語を先に置くことによってすっきりとさせます。

ある日本人教師に沖縄で会った。

ところで、日本語では、「述部以外のすべての構成要素（主部を含む）は述部を修飾する」と考えることも可能です。その上で、「長い修飾語を先に」というルールを適用すればよいわけです。

※ 『日本語 新版（下）』（金田一春彦：岩波新書）には次の記述があります。

…前略…      たとえば、日本語で、（1）春が来る

と言う。これは英語にすれば、（2）Spring comes.